# 新型コロナの先へ

## 上越商工会議所 青年部[座談会]

# 実行で得た成果と課題は

新型コロナウイルスにより発生した経済的な影響とどう向き合い、今後、何をしていくか。上越商工会議所青年部は12月1日、青年部の活動や現下の経済情勢を基に座談会を開いた。上越タイムス社共催。大島正寛会長をはじめ8人が出席し、感染対策と事業の両立の難しさ、地域に今必要なマインドなど、多方面にわたり活発な意見を交わした。

## 第1部 青年部活動と対策

上越商工会議所青年部会長 ㈱大島組代表取締役 大島 正寛
副会長 ㈱エコシステム専務取締役 藤井 浩幸
副会長 弁護士法人つばき・上越つばき法律事務所代表社員 原野 聖子
副会長 越後謙信きき酒マラソン実行委員長 大陽開発㈱代表取締役社長 荒木 克
総務企画委員長 ㈱肉のたなべ専務取締役 田辺 剛
商業振興委員長 ㈴春陽館書店代表社員 熊田 僚己
工業振興委員長 ㈱安全代表取締役 阿達 隆
地域観光委員長 ㈱山仙専務取締役 小嶋 宏志
コーディネーター ㈱上越タイムス社報道部 上原 雅樹

### 会員応援とデジタル化

### 「上越の魅力」発信 消費喚起と誘客

―1月に国内で初めて新型コロナウイルスが確認されて以降、青年部の活動も非常に厳しくなった。影響はいつ頃、委員会活動のどの部分に出たか。また、講じた（講じようとした）対策は役立ったのか。

田辺委員長（以下田辺） 会員交流や市内研修など、なんとか例年通りにはできた。青年部会員が在籍する飲食店には、各店の感染症対策、売りとサービスを再度PRする機会を設けた。仲間の現状を分かりやすく、見やすく配信でき、一定の刺激になった。

大島会長

原野副会長（以下原野） 交流会は接触の機会をほぼなくし、その分、名前で呼び合う形で交流を深めた。研修はGoToトラベルを活用して負担を減らした。目的地は上越市内に変更したことで、地元の魅力を再発見できた。

熊田委員長（以下熊田） 外部との研修、交流、視察、高校生への出前授業は不可能になった。新型コロナで売り上げの減った会員の事業所を応援する運動を展開。会員にクーポンを配布し、42事業所で実施。「普段使えない、行かない店で使えてうれしい」、事業所からは「新規顧客の開拓につながった」の声もあった。

藤井副会長（以下藤井） 政府の「GoTo」に先駆ける形で実施できた。「現金が動く、会員に回る」ことを第一に、テークアウトの周知を兼ねてクーポンを配布。喜んでもらえたと考えている。

―「越後謙信きき酒マラソン」をオンラインで実施した。実現できたポイントは。

荒木副会長（以下荒木） ビジネスで「Zoom（ズーム）」を使っていたので、マラソンでも使おうと提案。「コロナ禍で暗い中、やってくれてありがとう」の声も多く、期待に応えられたのでは。

荒木副会長

―オンラインでも「上越の魅力」を出場者に発信できたと考えるか。

荒木 「オンラインならではの楽しみあった」「来年は春日山に行きたい」などの声が寄せられた。春日山と上越への思いを広げられたのでは。

―参加者との交流など、課題とすべきことは。

荒木 「体験する楽しさ」をオンライン配信でどう伝えるか。電波が届かない場所が多いのは課題だ。上越市のメーン観光地といえる春日山城跡周辺で電波が届かない場所があるのは厳しい。

―11月中旬から感染拡大の「第3波」といわれる情勢。ビジネスにも大きな影響がある。今後の取り組みは。

阿達委員長（以下阿達） 一昨年からAI、IoTを研究、さらに「5G」も追加した。来年、上越市内でも5Gが整備される。ビジネスチャンスにしてもらおうと、顔認証や遅延再生、遠隔操作などを体験する勉強会を開く。5Gは世の中のあらゆるモノをつなぐことができる。地方ならではの使い方もあるはずだ。本社移転の促進や上越地域の産業の持続的発展にもつながると考える。

藤井 リモートワークに注目。建設業では現場との中継で、進行状況確認に活用している。最先端の技術を学び、着目することは青年部らしい。来年度に向けて活動の幅を広げたい。

出場者と上越をオンラインでつないだ、今年の「越後謙信きき酒マラソン」

阿達 地方は人口減少が続くが、コロナ禍で都市部から地方への人の流入が進んでいる。企業も人材確保につなげられる。

―事業年度末（来年5月）まで新型コロナの影響は続きそうだ。地域観光の取り組みはどう進めるか。

小嶋委員長（以下小嶋） マイクロツーリズムを念頭に、消費喚起と誘客に力を入れる。地域の魅力配信では、上越特有の、コシヒカリで作る「しっとり（した）チャーハン」に注目。インターネット上でのマッピングやブログを通じて、「しっとりチャーハンの魅力発信と発祥の地」を企画している。

荒木 真面目に企画し、面白く取り組み、発信して、新型コロナ終息後は訪れる人が増えることに期待している。

小嶋 市内で市場調査をしている。各店のチャーハンの傾向をチャート化する。土産づくりや県内全体への波及なども検討する。



## 第2部 経済活動と方向性

### 経済を前へ

### 危機だからこそ考える機会

―第3波といわれる感染拡大が発生している。地域経済の指標にも、新型コロナウイルスの影響が出ている。それぞれの認識や現状分析は。

大島会長（以下大島） 民間建築需要は落ち込んでいる。今年は大型案件も決まっていたが、コロナ禍で止まった。厳しい経営環境になっている今こそ、収益性を高めていかなければならない。旧来のやり方を見詰め直し、社内でのカイゼン活動を活発にしていくことが必要と考えている。また、助成金を利用しての設備投資や、人材育成にも力を入れている。

藤井副会長

原野副会長

荒木 協力会社が新型コロナウイルスの影響で仕事の応援に来られない。除雪業務は、感染者が発生した場合一定期間業務に従事できなくなる。1台当たりの乗務員数を2人から1人にする決断をするなど、われわれの考え方を変えるきっかけにもなっている。

田辺 リアルな外食に対する期待は根強いものがある。消費者はお店選びの新しい基準をそれぞれ模索している。従来、気の向くまま店に足を運んでいたのが、コロナ禍でさまざまな制約が発生し、消費者は「自分の中で設けたハードル」を越える店を探すようになってきている。

熊田 巣ごもり需要で店頭の書籍販売は増加した。一方で金融機関や医院、美容院からマガジンラックが消えた。需要は元に戻らないかもしれない。書籍以外の小売業でも商店街では、コロナの影響を受け、今後、廃業や事業縮小が懸念される。残念なことではあるが、まちが変わるきっかけになるかもしれない。また、日々店を開けることでお客が集まり、会話が生まれ、必要とされていることを実感する。

田辺委員長

熊田委員長

原野 法律事務所の事務員はテレワークに向かないと思っていた。しかし緊急事態宣言下で首都圏の事務所はまったく電話がつながらず不便を実感した。感染拡大防止のためのマニュアル整備を行う中で、テレワーク導入を決め、チャットワークやリモートアクセスの導入や必要なシステム変更を行っている。

小嶋 東京と大阪でゲストハウスを経営していたが、新型コロナウイルスの感染拡大で客数が減り、6月に撤退した。新型コロナウイルスの感染拡大よりも、消費行動を止められてしまうことが最も怖い。「あれもこれも駄目」というムードが経済にとって良くない。（消費に対する）ムードは上げていくべきだ。

―国内外への人の移動は大きく制限された。上越市は交通の要衝をアピールし観光誘客も目指してきたが、今後の観光ビジネスはどうなるか。

荒木 「きき酒マラソン」は、来年ぜひリアルでやりたい。オンラインでは主催者として不完全燃焼。参加者もそうだと思う。観光について言えば、人が来られないことを逆手に取ってアピールする手法もある。今まで通りのことではなく、一歩踏み出したやり方が必要だ。特定の世代や好みを持つ人へのアプローチも、オンラインならやりやすい。

阿達委員長

小嶋委員長

―伝統的な地域性と折り合いながら、新たなチャレンジをしていくのに必要な心構えは。

原野 決断に対して反対の声が上がったとき、立ち止まって声を聞くことも大切だ。何か始めたい時は小さく始めて、関係者を巻き込んでいくことも一つのやり方だ。

熊田 「きき酒マラソン」当日、スタッフと一緒に春日山を回った市民と話した。この大会を開いたことに礼を言われた。われわれの一番の味方は、やはり地域だ。取り組みを知ってもらい、協力してもらうための努力が必要だ。

阿達 生産性向上のため、根本から見直さないといけない。最近、メーカーの商品開発の協力も始めた。使う側が意見を出すことで作業効率の良い製品が生まれ、働き方改革、担い手の確保や育成にもつながる。

小嶋 コロナ下で新しいことにチャレンジするには勇気も労力もいる。しかし、青年部はそういうチャンスをくれる。「しっとりチャーハン」は大きなチャレンジだが、何かの起爆剤になれば。

田辺 自分のマインドを打ち出せる人は影響を与える存在に、そうでなければ振り回される側になる。意思を持って行動していけば、何か変わっていくはずだ。

荒木 「大人」になり過ぎないこと。何もない野原でも遊びを見つけられる、子どものような感性が必要。誰も見向きしなかったことが、数年後にはメーンストリームになっていることだってある。

藤井 錯綜（さくそう）する情報を正しく見極め、正しく取捨選択して前へ進んでいけるかどうかだ。一貫性を持つこと。青年部活動も一度決めたら（新型コロナを）正しく恐れながら、やるべきことをやっていく。

大島 新型コロナウイルスで亡くなる人もいるが、経済的な影響で自殺する人も増えているのが現実だ。感染対策をしながら、経済を前へ進めていかないといけない。そして互いに認め合う。「ウィズコロナ」とはそういうことだ。

青年部のテーマは「上越市の人口減少食い止めを各委員会で考える」だが、新型コロナウイルスにより、大きな危機感が先にやってきた。危機は経営や社会を考える機会になる。今がその時だ。

上越タイムス（2020.12.16）